

南インドのオールワール研究(Ⅱ)

— Āṇṭai の Tiruppāvai に ついて —

平岡昇

形式上の文学発展という観点からタミル文学を見るとシヴァとヴィシュヌ讃歌は英雄的 (puṇam) と恋愛 (akam) 形態をもつ個別的吟唱詩節 (taṇippālai) より直接に現れ、英雄詩的側面の一つである讃美と贈与を求めることに代表される讃美 (pāṇai) は bhakti 詩節の直接の源である。初期のシヴァとヴィシュヌ詩人に関しては、讃美は、領主に代わってシヴァやヴィシュヌの神への呼びかけであり、食物や土地や金の贈与に代って、恵み (aru) の贈与や救済を求める讃歌である。古代英雄詩の pāṇai 形式と Bhakti 讃歌には共通性もあり、両詩人は、自からの声で語り詩は、非常に個人的である。ヴェーダ讃歌に对照して、これらのタミル讃歌は、まったく儀礼的ではなく、崇拜における親密さの局面は、puṇam 形態の多くの初期の吟唱詩の如く、高度に発展し、最も重要な特徴として、讃美し、請う主体と、それを聞き、贈与する客体との関係であり、そこには、吟唱詩と bhakti 詩のまったく並行する部分が存在する。

ヴィシュヌ Bhakti 運動は、シヴァの運動と並行して行なわれたのであり、事実、初期のタミル Bhakti 運動は、二つの異なる径路を通して行なわれた一つの運動として見なされるかもしれない。

Āṇṭai は、ヴィシュヌ派 Bhakta 文学であり語源上は「沈む、没入する、没頭する」という意味より、Āṇṭai とは「(最高なるものに對して黙想に) 没ける者」という意味に解釈されるヴィシュヌ派の聖徒たちであり、詩人でもある。

南インドのヴィシュヌ聖典の最初の編者である Nāṭamūṇi (Skt. Nāṭhanuṇi) の名は、彼の孫といふ Yānuna o Agamaprāmānya の文末において見いだされる。そこで Nāṭamūṇi は Mukunda (解脱の贈与者、ヴィシュヌ) 神の偉大な帰依者であり、三真理 (cit, acait, jayara) を見抜く力を持った者として讃美されている。これらのことより彼は、九世紀後半より十世紀初頭に位置するものと思われる。彼の編纂した Nāṭyaiva tivyappirapantam (四千神頌) は、四つの千頌 (ayiram) より成り、十四人の詩人からなる作品の配列は一定しておらず、年代順に並べられたものでもない。この詩人たちのうち、十二人 (即ち、Poikai Āṇṭai, Putam Āṇṭai, Pey Āṇṭai, Tiruppāṇṭai, Tirumalai Āṇṭai, Tonjaraippoṭi Āṇṭai, Kulacēkarap Perumai, Periyāṇṭai, Tīrumanakai Āṇṭai, Nammāṇṭai, Maturakavi) は Āṇṭai として考えられる。また十人とする説もあり、この不一致は、Nammāṇṭai をヴィシュヌ神の化身とみなし、Āṇṭai を女性であるからという理由で排除されたところに起因する。Āṇṭai 達の中で Poikai, Putam, Pey の三人は最初の Āṇṭai とみなされ、十二人の詩人たちの活躍は AD 六〇〇年より九〇〇年に至るものと推定される。

Āṇṭai の中で唯一の女流詩人 Āṇṭai は、九世紀の人物と推測され、三〇詩節よりなる Tiruppāvai と一四三詩節よりなる Nāṭyaiva tivyappirapantam の二作品がある。この作品は、四千神頌の最初の千

頰に属し、全作品を通じて常に英雄は *Kṛṣṇa* である。

Āṇṭai にまつわる色々の伝説がある、彼女は、ヴィシュヌ神の三人の配偶者の一人 *Bhūmi devī* (大地の女神) の化身といわれ、サンスクリットでは *Godā* と呼ばれる。彼女は、マドゥライの南、*Śrīviliputtūr* に住む *Periyālvār* (Skt. *Vişṇucitta*) にちいす *tulaśi* 樹のもとで見つけられ、彼の養女として育てられた。彼はヴィシュヌ神にささげる花飾りを作ることを彼女に命じていた。彼女は神への信愛の故にその花飾りをまず自分でまどっていたのである。そのことを知らないで彼は花飾りを神に供していたのであるが、ある日、それを知り、彼は神への昌漬として、嘆き悲しむのである、しかし夢において神が現われ、彼女のまどった花飾りを本当に望んでいることを告げるのである。それ故に彼女は、(最初に花飾りをまどい、神にささげた娘) *cūṭik-kotūta-nacciyār* と呼ばれる。彼女が結婚適齢期に達した時、彼女は、女性として、神との永遠の合一を求めて *Śrīraṅgam* の *Raṅganātha* 神を夫として選んだのである。神は彼女を受け入れ、彼の神殿において彼女は消え去ったと言い伝えられているのである。このような神への *Āṇṭai* の信愛を表した詩節が、結婚式の讃歌として現在にも唱えられているのである。

三〇頰よりなる *Tiruppāvai* (神聖なる誓い) の一頰を *J. Filiozat* の書にあげられている *Skt.* の *Manipravāla* の書かれた注釈をもとに訳して見る。『そして、まず最初に *Margasīrṣa* の月に沐浴を始める牧夫の娘たちは、沐浴を求める女友達を呼ぶ。』

Markai の月の満月の美しい日 沐浴に行くあなたち、行きなさい 飾りをつけて 幸せで満たされた牧夫たちの村の幸福な娘たちよ 鋭い槍をたさえ恐ろしい行動をとる *Nā-*

南インドのフルフル研究 (Ⅱ) (平岡)

ndaḡapa の息子 美しきで満ちた目をもつ *Yāsoda* の若き

獅子 黒い肉體 赤い眼 輝く月の如き顔をもてるもの

これこそが *Narāyaṇa* 私達にこそ太鼓を彼は与えよう 大地の民は讃美するために唱える *ēlōrempāvāy* ! (1)

こゝに言う *Markai* は *G. U. Pope* は一二月の中旬から一月の中旬にあたることを定義づける。八行目にあらわれる *ēlōrempāvāy* の文句はこの作品のすべての頌でくりかえし出てくる言葉であり、この言葉は、シヴァ派の詩人 *Manikavācakar* の *Tiruvempāvai* (*Tiruvācakam* の七章にあたる) の一〇頌すべつに見られ、詩の形も四句の八行からなる *Kalippā* 体になっている。すなわち *ei* (あゝー) *ō* (考えてください) *em* (私の) *pāvāy* (誓いを) と訳せるのであるが、多くの検討の余地があるようであり今後の研究課題の一つとして行きたい。

1 *K. V. Zvelebil*: A history of indian literature, VOL. X. Tamil Literature. Wiesbaden, 1974. Handbuch der Orientalistik, Tamil Literature. Leiden 1975. を参照。

2 *T. Burrow and M. B. Emeneau*: A Dravidian Etymological Dictionary, Oxford, 1961.

3 *V. R. Ramachandra Dikshitar*: Studies in Tamil Literature and History, Madras, 1936. 花飾りに付くうさぎの毛より彼女の行動が発覚したという。 *Jean Filiozat*: Un texte Tamoul de dévotion Viṣṇouite Le *Tiruppāvai d'Āṇṭai*, Pondichéry, 1972.

4 『カッタ内は右記の *J. Filiozat* の本中にある *Tiruppāvai Saṁskṛtānuyākhyānam* の訳である。(東大寺勧学院副院長)